〔資料紹介〕

縄文時代前期後半の一資料

―千葉市東田遺跡出土の資料を礎にして―

寺　門　義　範

は　じ　め　に

「貝塚博物館紀要」第9号で筆者は、「千葉県下における縄文時代前期後半期の諸問題(1)」というテーマに取組み、縄文時代前期後半の文化を、千葉県という地域の中で、吟味検討をする必要性のあることを説いた。その具体的な作業の一つとして、昨年は、千葉市宝導寺台貝塚出土の資料を礎に、該時期の浮島式土器群と諸磯式土器群との在り方を検討し、その文化的な流れの中で位置づけようと試みてきた。そこでは、宝導寺台貝塚出土の浮島式および諸磯式土器群の在り方が、それぞれの土器型式の中において、従来、他の遺跡でとらえられていた在り方と異った様相をみせている事を示唆できるとともに、未だ、不明な部分の多かった本地域の前期最終末における土器様相の一端を、紐解くべき資料の提示ができた。

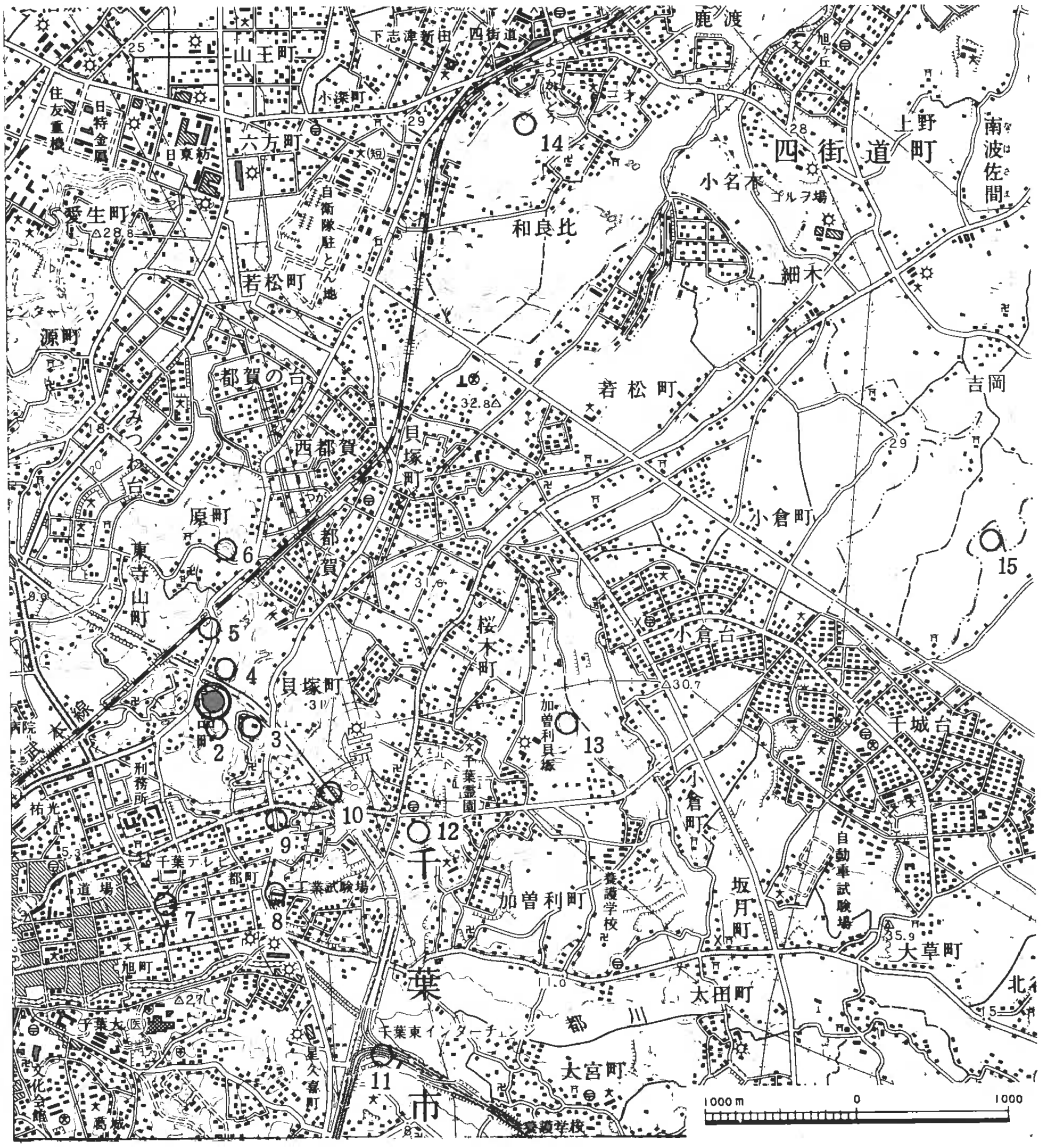
本稿では、このような成果を踏まえて、それを確実なものとするべく、さらに資料の集積を図ろうとするものである。

なお、ここで扱おうとする資料は、千葉市高品町地先で㈱白川土建が計画をした資材置場造成に先立って、昭和５９年、千葉県教育委員会の指導の下に市教育委員会が実施した確認調査で得られた資料の一部であり、他にわずかながら前期中葉・黒浜式土器、中期・阿玉台式土器、加曽利Ｅ式土器、後期・加曽利Ｂ式土器、それに土師式土器なども出土している。

1.　東田遺跡と周辺の前期後半の遺跡

東田遺跡は、千葉市高品町90番地を代表地籍として所在しており、千葉市史史料編Ｉに掲載されている駒形遺跡の北側に位置している。地形的には、東京湾に開析する都川の一支谷である東田支谷の西側に形成された、標高26m余の洪積台地上に占地しており、支谷に臨んだ東緩斜面に遺跡の展開をみせている。遺跡は、該時期のものとしては比較的規模も小さく、遺物密度も薄いものであった。

なお、この東田支谷については、支谷に接した近隣台地上に、早くから該時期の遺跡が集中して存在することが知られており、この東田遺跡をのせる洪積台地南端の駒形遺跡②をはじめとして、支谷を挟んだ東側対岸に地点貝塚を伴なう荒屋敷西貝塚③、溺れ谷を挟む北側台地



第１図　東田遺跡と周辺の縄文前期後半期の遺跡

には、先の京葉道路第四期工事の折に調査をされた旧キッ長遺跡の高品第２遺跡Ｂ地点④、さらに支谷奥の台地上に宮腰遺跡⑤などがみられる。しかし、このうち遺跡内容が明らかにされているものは、わずかに高品第２遺跡のみであり、未だ本支谷における遺跡集中が何に起因しているものなのかは明確ではない。

一方、都川本谷の中・下流域における該時期の遺跡としては、「貝塚博物館紀要」第11号で、筆者が出土資料の紹介をした低地に所在する宝導寺台貝塚⑦、洪積台地上の向台遺跡⑧、木戸場遺跡⑨、車坂遺跡⑩、それに河岸段丘緩斜面に位置する星久喜遺跡⑪、台地上の立木遺跡⑫、台地緩斜面の加曽利貝塚東傾斜面遺跡⑬など、主なものだけでも７遺跡の存在をみることが

できる。これらのうち宝導寺台貝塚をはじめ、車坂遺跡、星久喜遺跡、加曽利貝塚東傾斜面遺跡の４遺跡では、すでに調査による資料も提示され、ある程度遺跡の内容が明らかにされてきている。

また本地域の北方には、鹿島川の支谷が発達しており、そこにも該時期の遺跡の存在が知られる。四街道市の和良比遺跡⑭や木戸先遺跡⑮はその著名なものであり、両者とも現在調査が進められ、近々のうちに遺跡内容も明らかにされてくるであろう。

以上、東田遺跡とそれをとりまく該時期の周辺遺跡について、その所在等を通観してきたが東田支谷をはじめとして、都川本谷・鹿島川支流などに、該時期の生活痕跡が明らかに認められているのにもかかわらず、いずれも住居址など遺構の検出が少なく、遺跡内容も明確さを欠くものであり、今後にのこされている課題は、極めて大きいようである。

2. 東田遺跡出土の資料

前述したように本遺跡からは、縄文時代前期前半から後期中葉、および奈良・平安時代の資料が出土している。これらの資料は、そのほとんどが土器片であり、復原できるものは皆無であった。その内、量的に主体を占めているのが縄文時代前期後半の、所謂、浮島式ならびに諸磯式土器群である。

本稿では、特に該時期に関する資料累積の一助とするべく、これらの資料を抽出して観察していくことにしたい。

なお資料の分析にあたっては、便宜的に次のごとく大別し、それぞれ型式毎に、その特徴となる器形・文様組成の上から細別して、個々の資料を検討していくことにする。

A　浮島式土器群としてまとめられるもの

B　諸磯式土器群としてまとめられるもの

C　前期最終末に位置づけられるもの

A　浮島式土器群としてまとめられるもの（第２図１～27、第３図１～27、第４図１～25、第５図１～８）

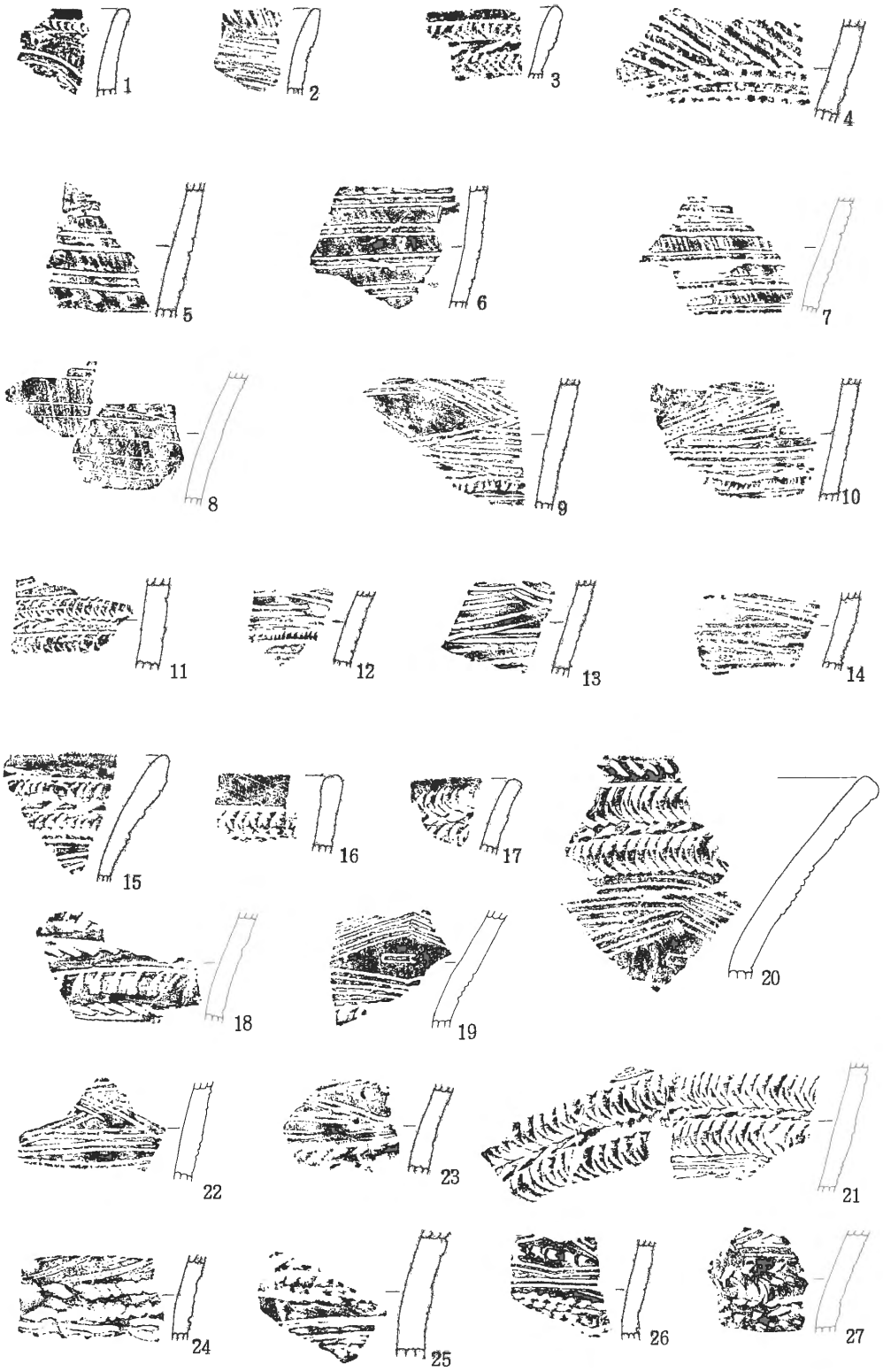
本遺跡にあっては、該時期の主体を占める土器群である。該時期の資料中、実に９割近くを占めている。以下、型式毎に分けて述べることにする。

第１類　浮島Ⅰ式の範疇に含まれるもの（第２図１～14）

該期土器群中、比較的少ない量であり、本遺跡においては、客体的な存在であったものと考えられる。以下その特徴となる文様組成から３種に分けて述べる。

ａ種　（第２図１・３・４・10～12）

幅狭な変形爪形文と半截利用の平行沈線とが組み合されているグループである。量的にこの種



第２図　東田遺跡出土の土器(1)

0　　10cm

の土器においては多い方である。器形はその大部分が深鉢と考えられ、口縁は外反する平口縁である。半截竹管工具を利用した幅狭な変形爪形文は、概して口辺と胴部に横走して施されており、その間を菱形状（9・10）や弧状（1・12）の平行沈線によるモチーフ文が描かれている。1は、この幅狭な変形爪形文のかわりに有節平行沈線が施されている。焼成は全体として良好であり、胎土も細かい。

b種　（第2図2・13・14）

半截利用の平行沈線のみのグループである。2は唯一例の口縁部破片であるが、口辺は強く外反している平口縁で、深鉢形を呈するものと考えられる。文様は半截竹管の内側を利用して、口辺に刻み目を施し、胴部に平行沈線を横走させている。また13・14は胴部の資料である。胎土・焼成とも良好といえる。

c種　（第2図4～8）

地文としてのまばらな撚糸文と半截利用の平行沈線との組み合せがみられるものである。本類土器中、量的に最多を占めているが、いずれも胴部破片である。文様は地文として右下がりの無節ないし単節の撚糸文を施し、その上に半截竹管を利用した平行沈線を横走させたり（5～7）、斜行させたり（4）している。また8については、半截利用の平行沈線のかわりに棒状工具によって、沈線を施している例である。焼成はいずれも堅牢で、胎土は緻密である。

第2類　浮島Ⅱ式の範疇に含まれるもの（第2図15～27、第3図1～15）

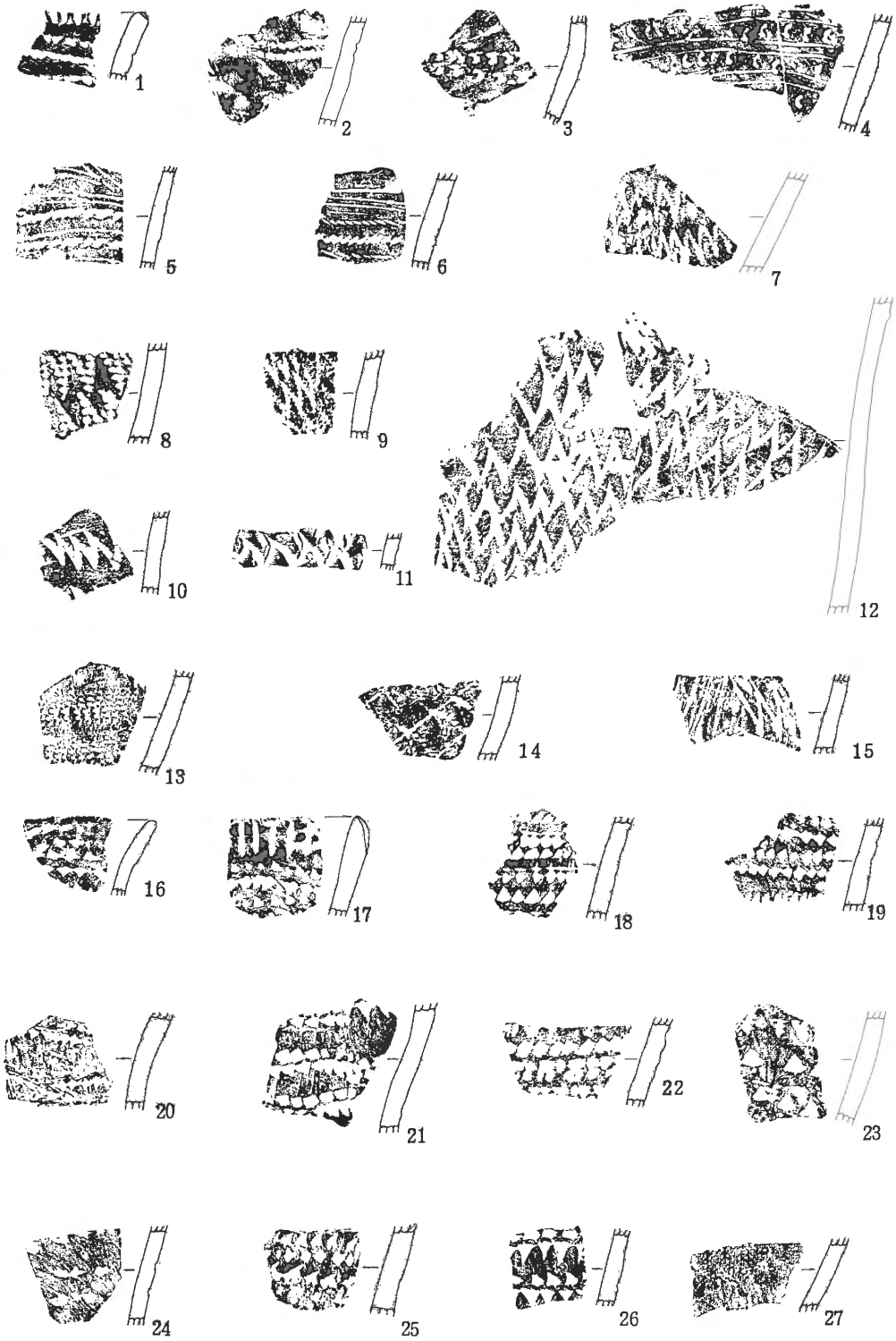
本類土器は、後述する浮島Ⅲ式に次いで多い出土量をもっている土器群である。文様組成の上から3種に分けることができる。

a種　（第2図15～17）

幅広の変形爪形文と半截利用の平行沈線によるモチーフ文の組み合せをもつグループである。出土量は、波状貝殻文の類と比較すると少なめであるが、かなりの割合を占めている。器形は平口縁の深鉢形を呈しており、口縁は朝顔状に強く外反している（15・17・20）。文様は、半截竹管を利用した幅広の変形爪形文を、口辺と胴部に一ないし二条の割合でめぐらし、その間を集合条線様に半截利用の平行沈線で充填するのを特徴としており、その平行沈線もよく菱形状のモチーフ文を描いている（19・20・22・23・26）。また口辺ないし胴部にめぐらす二条の幅広の変形爪形文間には、半截背や丸味をもつ棒状工具による連続刺突文を施すのも特徴である（15・17・18・20・21）。概してみると、この種の土器は第1類a種からの発展としてとらえられるものであり、その文様のダイナミックさから、施文様相も熟達の跡をうかがわせるものがある。胎土には細礫を含んでいるものも一部あるが、焼成は堅牢といえる。

b種　（第3図1～6）

特殊な変形爪形文をもつグループと、半截竹管の連続刺突をもつグループのものをまとめてみた。資料は図示した6例のみで少ない。器形は、口縁部破片が1例だけなので明らかではな



第３図　東田遺跡出土の土器(2)

0　10cm

いが、おそらく他と同様に深鉢形を呈するのではなかろうか。まず、特殊な変形爪形文のグループのものとして、1・2・5・6がみられる。文様は半截竹管の両端のみを交互に器面に押しあて、横走させている1・2・6の例のものと、5のように一方の端で沈線を描きながら他方で連続刺突をさせるものがある。しかも5・6の例は半截利用の平行沈線との組み合せ文様となっている。また、3・4は半截竹管による連続刺突文を施しているものである。これらは、その文様からすると、本類土器より時期的に多少古さを感じさせなくもないが、ここでは一つのグループとしてまとめておくことにする。胎土・焼成は比較的良好といえる。

c種　(第3図7～12)

波状貝殻文をもつグループである。本類土器の中では、最多の出土量である。しかし、いずれも胴部破片だけであるため、器形および文様組成については明らかにすることはできない。おそらく、深鉢形を呈していたものであろう。また、文様組成においても、12の例が幅広の変形爪形文をもつグループの胴下部破片であることがわかる以外は、はたして器一面に波状貝殻文が施されていたものなのか、他の凹凸文などとの組み合せをもっていたものかは不明である。施文具としては二枚貝やサルボウ・ハイガイなどのアナダラ属の貝殻を使っており、技法的にも大胆に施されている。なかでも11の例はアナダラ属とは異なる二枚貝の施文具を使用していながら殻の外縁の引きずり痕が残されているめずらしい例である。胎土は砂粒を含んでいるものもあるが、焼成は比較的良好である。

第3類　浮島Ⅲ式の範疇に含まれるもの(第3図16～27・第4図1～25)

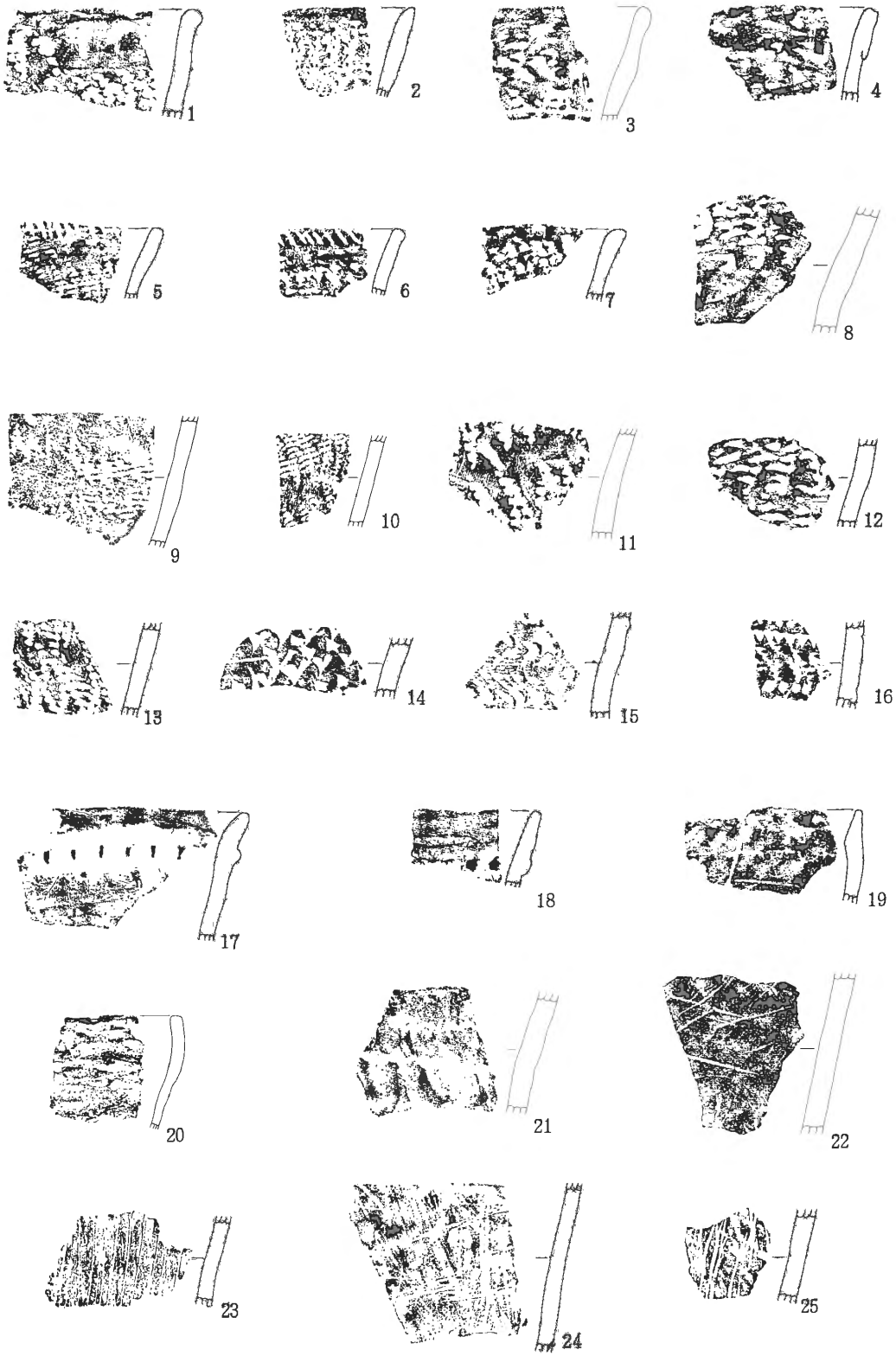
本遺跡での該時期の土器の中では、出土量の上から主体となる土器であり、全体の7割余を占めている。以下、6種に分けて述べることにする。

a種　(第3図16～26)

所謂「三角文」を施しているグループである。量的には波状貝殻文のものと同じ位であるが、比較的小片が多く、図示できる資料が少ない。器形からみると、図示できた口縁部破片が2例だけであり、小破片のため定かではないが、多くの他の例から口縁が緩く外反する平口縁の深鉢と考えられる。口辺は半截竹管を利用した縦の刻み目を有するもの(17)と、直接文様に移行するもの(16)とが共存している。文様は、いずれも「三角文」として総称されているものであるが、16～22・24・26のように半截竹管を施文具としているものと、23・25のごとく二枚貝やサルボウ・ハイガイなどのアナダラ属の貝殻を施文具としたものに分けられ、それら三角文を器面に数段にわたって施している。胎土は比較的緻密なものが多いが、なかには小礫を含んでいるものもあり、焼成にもばらつきがある。

b種　(第3図27)

櫛歯状工具による刺突文をもつものである。図示した胴部破片一例のみである。小破片のため何本の櫛歯であるかは不明であるが、5本以上であることは確かのようである。焼成、胎土



第４図　東田遺跡出土の土器(3)

ともに比較的良好である。

c種　（第4図1～16）

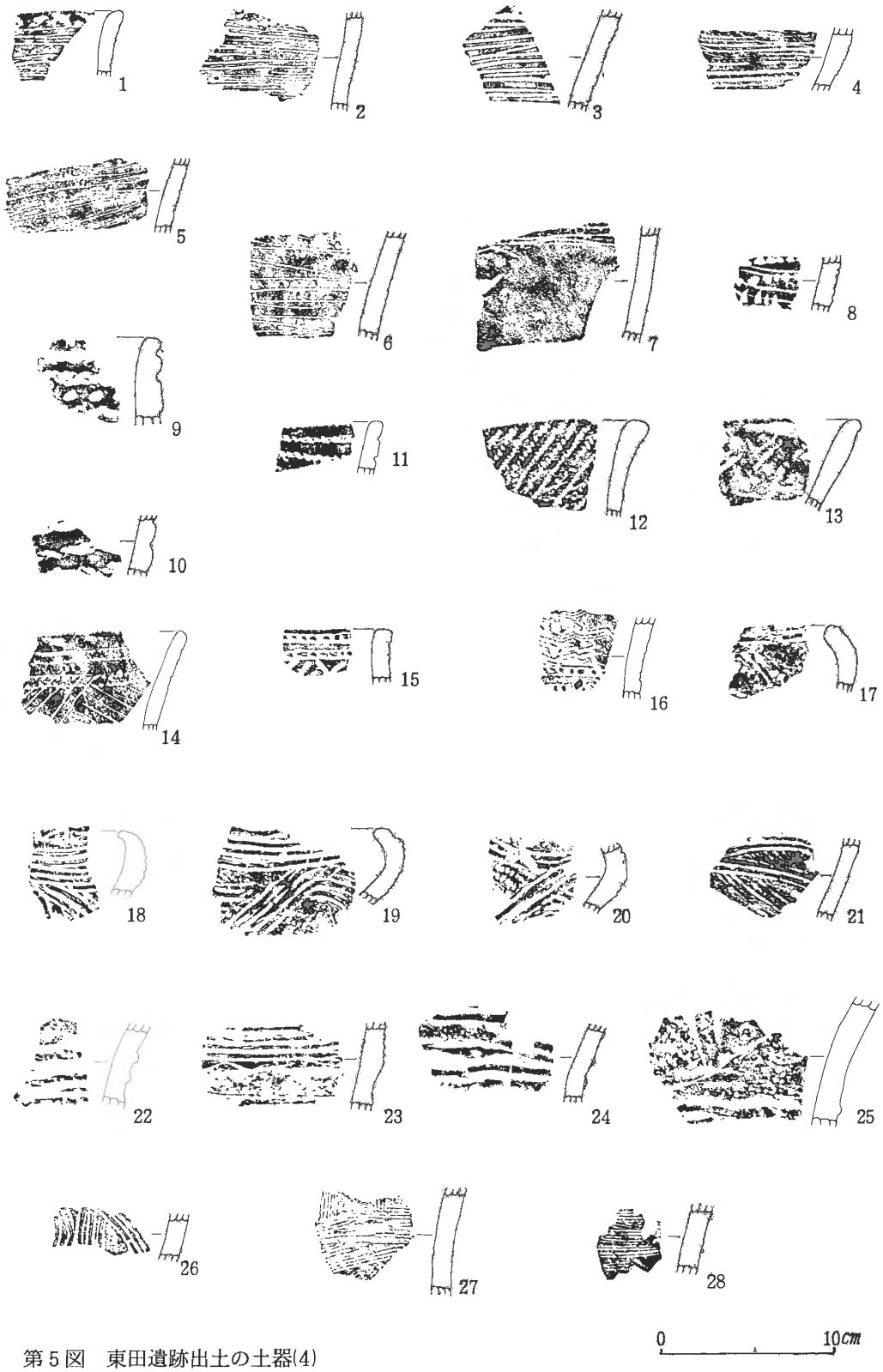
波状貝殻文と波状貝殻文の変形したものをまとめたグループである。量的にも多く、破片としても比較的まとまりをもっている。図示した1～7までの口縁部破片からすると、やはり平口縁の深鉢形を呈する器形と考えられる。文様は、器面全体に施された波状貝殻文が特徴的であり、第2類c種に比して、交互に支点をかえて施す波状貝殻文も明らかな変化をみせている。すなわちサルボウ・ハイガイなどのアナダラ属の貝殻を施文具としているものは、交互に支点をかえての押捺に、あらたに引きずる技法を併用しはじめ（2～4・8・12・13）、終局には5・9・10の例のごとく、貝殻の放射肋が集合条線文のように表現されてくるのである。一方、二枚貝を施文具として使っているものとしては、14・15の波状のつけ方が豪快な例や、アナダラ属の場合と同様、引きずりの技法を伴なうものがみられる。またこの貝殻文は、単一文様で成り立っているものと、5・6のように口辺に半截竹管による刻み目をもつもの、16の例のように三角文など他の文様と組み合されるものがある。胎土・焼成は大体において良好といえるが、なかには粗雑な作りの資料も含まれている。

d種　（第4図17～21）

凹凸文のあるグループである。この中には輪積み痕をのこしているもの（19～21）も含んでいる。出土量はさほど多くはなくあまり目立った存在にはなっていない。器形は口縁が緩く外反するか、直口に近い立ち上りをみせる深鉢と考えられ、いずれも平口縁形態をとっている。文様は本遺跡出土の資料の場合、他の文様との組み合せをもつものはみられず、単一文様による施文になっている。17は緩く外反する口辺に、一条の凹凸文をめぐらしているもので、18は口辺の輪積み痕上に凹凸を施しているものである。また19から21の資料は、輪積み痕をもっている資料である。19は口辺内面を斜めに削り、内側に肥厚帯をつくり出しているもので、浅鉢形態をもつものかもしれない。外面の輪積み痕はその痕がのこされるだけの、面的な整形がみられる。また20は、比較的小型の深鉢と考えられ、輪積み痕は横走するヘラ削りによって整えられているものである。胎土・焼成については、この種の土器の多くがそうであるように、あまり良好とはいえず、砂粒が比較的多く含まれており、器面の粗さが目立つ。

e種　（第4図22～25）

縦ないしは斜行する沈線文を施しているグループである。いずれも胴部破片として認められ単一文様なのか、他の文様との組み合せをもつものなのかは明らかではないが、量的には、小破片も含めると無文のものと同様みすごしにできないだけの量がある。このうち22と24については、文様というよりも器面整形時における擦痕の可能性もないわけではないが、23・25は明らかに半截竹管や棒状工具などの施文具によって、縦の沈線を施している。しかも資料のなかには、わずかではあるが23・25のように、波状貝殻文と併用して施文しているものもあり、この種の土



第５図　東田遺跡出土の土器(4)

器の一部としてまとめてみた。総体的に、胎土には砂粒を多く含んでおり、焼成も堅牢とはいいがたい。

f種　（第5図1～8）

半截利用の平行沈線文をもつグループである。前の浮島Ⅰ・Ⅱ式のそれとは明らかに異なる施文技法を持ち、平行沈線自体が比較的密接して施されるのを特徴としている。量的には多い部類を示しているが、その大半はやはり胴部破片によって占められている。この中には三角文・波状貝殻文などの他の文様と組み合されているもの（2・8）も、かなりの割合で含んでいるからであろう。器形は図示した口縁部破片から類推すると、他の本類のそれと同じように、わずかに外反をする平口縁の深鉢と考えられる。文様は口辺に沿って半截利用の粗野な刺突がみられ、それ以下胴部にかけて半截竹管による平行沈線文が全体的に施文されている。また、5・6の例では半截竹管のかわりにヘラ状工具を使って平行沈線文を施しているものである。全体的に胎土には砂粒が多く含まれているが、焼成は良好といえる。

B　諸磯式土器群としてまとめられるもの（第5図14～28）

浮島式土器群に対して、本土器群の出土量比は、極めて少ない数値を示している。図示したものがその大部分であり、諸磯b式がなかでも多い。以下土器型式によって3類に分ける。

第1類　諸磯a式の範疇に含まれるもの（第5図14～16）

わずか3例のみが検出されている。いずれも小破片のために、器形などは不明な部分が多いが、口縁が外反ないしは直口する平口縁の深鉢と考えられる。文様は、口辺と胴部に爪形文をめぐらし、胴部に斜行する半截利用の平行線文（14）や、波状文（16）を施文している。また16については縦の刺突文もみられる。15は丸味のあるヘラ状工具で施文したものであろう。胎土および焼成は良好といえる。

第2類　諸磯b式の範疇に含まれるもの（第5図17～25）

前述したようにこの種の土器は、諸磯式土器群のなかで主体を占めている土器である。その文様から2種に分けることができる。

a種　（第5図17・18・22・24・25）

浮線文の土器である。口縁部は18の1例だけであるが、口辺は極度に内湾曲させているものである。文様は、地文に比較的大粒のL撚り単節縄文をころがし、その上に細かな粘土紐を貼付した浮線文を配している。しかも、22・24は浮線文上にも縄文を施している。胎土には石英長石・雲母などの細粒を多く含んでおり、焼成は比較的堅牢なものの、大味な感を漂わせる出来である。

b種　（第5図19～21・23）

平行線文の土器である。口辺はa種の場合と同様に、極度な内湾曲傾向がみられており、器

形的にも類似するものであろう。また文様も、地文に比較的大粒の縄文を施文しているところは同じであるが、この種の土器は、粘土紐の貼付に変わって、半截竹管による平行線のモチーフ文をその上に配しているのが特徴的である。この半截竹管の平行線文も、技法的には器面に対して浅く押しつけて施文したものと、深く押しつけたものとがある。また23の資料には、ヘラ状工具によってｘ字状の連続沈線も施され、文様組成上に変化をもたせている。胎土は、ａ種に比べて石英などの含有も少なく、焼成も堅牢であり、内面の整形も丁寧である。

第３類　諸磯ｃ式の範疇に含まれるもの（第５図26～28）

図示した三例のみの検出である。いずれも胴部の小破片であり、器形をさだかにすることができるものではない。文様は半截竹管および櫛歯状工具を用いた集合条線文であり、特徴的な大小の粘土の瘤や突起は付されてはいない。胎土には石英・砂粒などを含んでおり、焼成は堅牢である。

Ｃ　前期最終末に位置づけられるもの（第５図９～13）

本群土器の出土量は、本遺跡では極めて少なく、図示してあるわずか５例のみである。その文様においても、本来は、三角状彫刻文・櫛歯条線文・点列文など比較的豊富さをうかがわせるのであるが、本遺跡出土の資料では縄文をもつ土器のみであった。以下施文技法のちがいから、２つに分けて述べることにする。

ａ種　（第５図９～11）

縄文原体の側面圧痕をもつグループである。口縁部破片は９と11の２例である。いずれも平口縁の深鉢と考えられ、口縁から胴部にかけて横走する側面圧痕を押捺している。９は口唇部にも側面圧痕の押捺がみられ、口辺の側面圧痕間には原体の端を直接押しつけた刺突様の連続文もみられる。また10の側面圧痕は、長さ1.5㎝の原体を連続的に押捺しているものである。ちなみにこれら側面圧痕に使用している原体の縄は、９が複節Ｒ撚りであり、10は単節Ｒ撚り、11が単節Ｌ撚りである。胎土は比較的砂粒を多く含んでいるが、焼成は良好である。

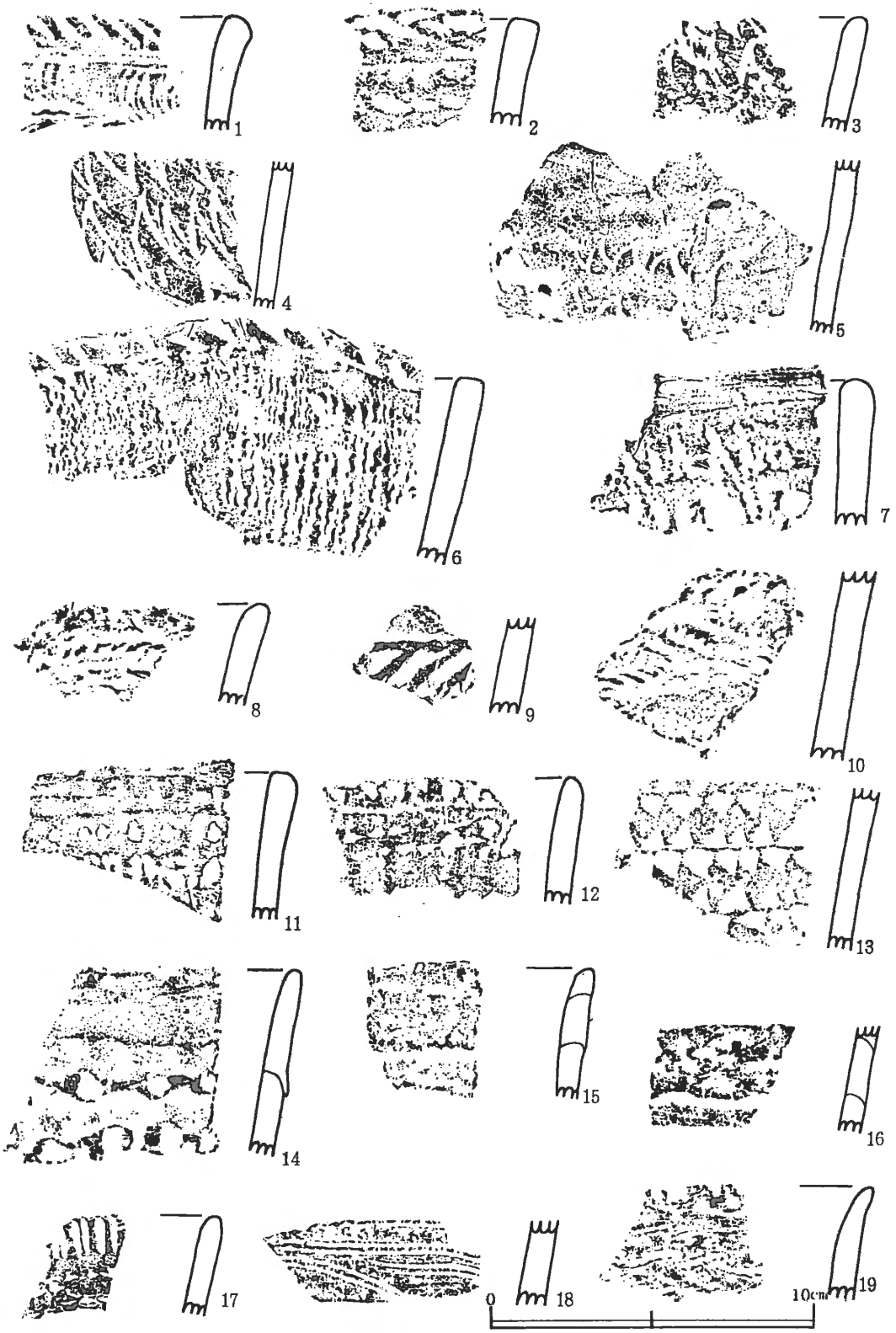
ｂ種　（第５図12・13）

縄文のみの土器である。いずれも平口縁の口縁部破片であり、深鉢形を呈するようである。文様は、いずれも原体Ｒ撚りの複節の縄を使用しており、12は口唇部にも縄の側面圧痕を押捺している。胎土は、両方とも砂粒を多く含み、器面の粗れが目立つ。焼成は脆い。

3.　東田遺跡出土の土器にみられる傾向

以上、東田遺跡出土の前期後半期の資料について、大きく三群に分けてその型式毎の土器様相を述べてきたが、ここでそれらを要約してみることにしょう。

まず浮島式土器群についてであるが、本遺跡においては、該時期の主流を構成する土器群で



第 6 図　高品第 2 遺跡Ｂ地点出土の土器（京葉 1973より）

あり、一応、浮島Ⅰ式からⅢ式にいたる各型式の土器の存在が認められている。しかし、その主体を占めているのは、浮島Ⅱ式とⅢ式とであり、なかでも浮島Ⅱ式の幅広の変形爪形文と半截利用の平行沈線文との組み合せをもつもの(第２類ａ種）と、波状貝殻文をもつもの（第２類ｃ種）、それに浮島Ⅲ式の三角文をもつグループ（第３類ａ種）、波状貝殻文と波状貝殻文の変形したもの（第３類ｃ種）とが、特に目立つ存在であった。また、それぞれの型式にみられる文様組成は、一応のバラエティに富むもので、県北および茨城県方面での、所謂、浮島式土器としての普遍性を具備しているものであった。ただ本遺跡にあっても、後続の土器である興津式に比定される資料は、１例も認めることができず、前期末の本遺跡の在り方に不明瞭な部分がのこることになった。

次に、諸磯式土器群であるが、前述の浮島式土器の場合と同様、諸磯ａ式からｃ式までの存在はあったが、その出土量は全体的にわずかなものである。浮線文（第２類ａ種）ないし平行線文（第２類ｂ種）をもつ諸磯ｂ式が主体で、諸磯ａ式・ｃ式のものは数点にすぎなかった。

また、前期最終末に位置づけられる土器として、本遺跡では極めて消極的な資料を認めたにすぎなかった。縄文原体の側面圧痕を器面にもつものと、縄文だけを施したものとであり、それもわずかな量の小破片のみであった。そこには、先の宝導寺台貝塚資料でみられた、器面に縦ないし斜行するヘラ削り痕をもつ資料や口辺に粘土帯をめぐらせた資料などは、１例も検出することができず、その様相に相違のあることがうかがわれた。

このように、前期後半期の東田遺跡出土の土器にみられる傾向は、県北および茨城県方面の色彩を濃厚にもっている浮島式土器群がその主体を占め、西南関東地方の諸磯式土器群と前期最終末に位置づけられる土器とは、いずれも量的にわずかな数値を示しているにすぎず、本地域における該時期の一般的な遺跡傾向をみせているものであった。

そこでこの傾向を、さらに確固なものとして理解するために、本遺跡の北側、溺れ谷を挟んで隣接している高品第２遺跡Ｂ地点出土の資料を参考に、若干の検討と対比をしてみよう（第６図参照）。なお、高品第２遺跡Ｂ地点（以下高品第２遺跡とする）は、京葉道路第四期工事の折に調査された遺跡であり、図示した資料はその報文からの抜粋である。

報文を読んでみるに、同遺跡から出土した該時期の資料は、東田遺跡とほぼ同様の時期と内容とをもっていたことがわかる。しかし、その細部を検討してみると、若干の相違もあるようである。すなわち、両遺跡ともその主体を占める浮島式土器群を例にとるならば、まず、①浮島Ⅰ式の存在が、高品第２遺跡では認められていないことである。たしかに東田遺跡にあっても、出土はしていても量的には低い数値のものである。また、②浮島Ⅱ式においては、東田遺跡の場合、豪放な波状貝殻文を施文した土器とともに、幅広の変形爪形文と半截利用の平行沈線文との組み合せをもつ土器が、その器形上の特徴をよくもって量的にも比較的まとまりをもって検出されているのに対して、高品第２遺跡でのそれは内容的に乏しいものである。さらに③

浮島Ⅲ式では、両遺跡ともその主体を半截竹管ないし貝殻による三角文を施文した土器に置いているが、それとともに浮島Ⅲ式を代表している波状貝殻文の施文技法の上に、それぞれの差異がみられる。つまり、東田遺跡では、施文具である貝殻の腹縁を引きずって多くは施文されているのに対して、高品第２遺跡のそれは貝殻による波状を比較的密に押捺し、集合条線様の引きずりのないものが目立っている。他方、輪積痕をもつ土器では、高品第２遺跡の方が比較的出土量も多く、まとまりをもっているのに対して、東田遺跡の場合は客体的な存在がみられ、土器様相の偏在がみられるのである。

かくのごとく、両遺跡でその主流を占めている浮島式土器群について、その内容の細部を対比してみると、両遺跡とも浮島Ⅲ式の時期に、最も豊富な資料をもち、地形的にも近接していながら、その文様組成・施文技法などにわずかながら差が認められた。

しかし、両遺跡の該時期を代表する土器は、あくまで浮島式土器群、それも県北・茨城県地方の色彩を濃厚にもっている、所謂、本来的な浮島式土器であることには変りなく、ここでは両遺跡とも、本地域に一般的な文化内容をもつ遺跡としてとらえておくことにする。

(千葉市教育委員会文化課)

参考文献

西村　正衛　「茨城県稲敷郡浮島貝ケ窪貝塚」　早稲田大学教育学部学術研究　第15の１号　１９６６

「茨城県取手町向山貝塚」　早稲田大学教育学部学術研究　第16号　１９６７

古和田台遺跡調査団

「古和田台遺跡」　１９７３

庄司　　克　「千葉市都町　宝導寺台貝塚発掘調査概報」「貝塚博物館紀要」第３号　1977

寺門　義範　「千葉県下における縄文時代前期後半期の諸問題(1)」「貝塚博物館紀要」第９号　１９８３

「縄文時代前期後半から中期初頭にかけての一資料」「貝塚博物館紀要」第11号　１９８４

財団法人千葉県都市公社

「高品第２遺跡」　京葉　１９７３

「車坂遺跡」　京葉　１９７３

「星久喜遺跡」　京葉　１９７３